

二〇一八年度

沖縄大学 一般入試（前期）

「国語」

・法経学部 法経学科

・人文学部 国際コミュニケーション学科

福祉文化学科

こども文化学科

国語

※答はすべて解答用紙に書きなさい。

【問題】 つぎの文章は、森有正の執筆した「経験と体験」(『生きることと考えること』所収、講談社、一九八九年第三七刷発行)を一部改変したものである。それを読んで、あとの問いに答えなさい。

体験と経験ということばの使い分けは、私自身、非常に人工的に見えてくることもあるほどです。これは非常に①こんなんな問題ですが、②大筋は、私の中に一応つぎのように成立していると思うのです。

人間はだれも「経験」をはなれては存在しない。人間はすべて、「経験を持っている」わけですが、ある人にとつて、その経験の中にある一部分が、特に貴重なものとして固定し、その後の、その人のすべての行動を③しはいするようになってくる。すなわち経験の中のあるものが過去のなものになったままで、現在に働きかけてくる。そのようなとき、私は体験というのです。

それに対して経験の内容が、絶えず新しいものによってこわされて、新しいものとして成立し直していくのが経験です。経験ということは、根本的に、未来へ向かって人間の存在が動いていく。「A」、体験ということは、経験が、過去のある一つの特定の時点に④凝固したようになってしまふことです。

だから、どんなに深い経験でも、そこに凝固しますと、これはもう体験になってしまふのです。これは一種の経験の過去化というふうに呼ぶことができましょう。過去化してしまつては、経験は、未来へ向かって開かれているという意味がなくなつてしまふと思ふのです。

たとえば現在の医学において、ある病気に対しては、東洋医学、あるいは漢方医学、鍼灸医学というものが非常に有効だということは確かです。しかし、その⑤きそになっている⑥経路、つまりすじみちということになると、どこまでそれが確実なものかわからない。わからないけれども、ある一つの過去の経験をそこに定着させたもので、そこからすべてを説明していこうとするわけです。

これは一つの例で、しかも有効だからそれでいい。(1) しかし同時に、これは非常な危険を伴っている。というのは、そのために、新しく出てくるすべてのものを⑦閉ざしてしまふということもありうるからです。

このように、経験というものが過去に凝固して、それが絶えず自分の⑧いしきの中で繰り返されるといふ過程をとる、それが体験です。しかしその根本は、経験がいつも新しく名辞を定義するといふ思想行為が不必要になつている、それを私は凝固というので

す。ところで、ほんとうの経験というものは不断に新しい一面をあらわしてくるものなのです。

【B】戦争に行ったことが、ある一つの⑨記憶になって残り、何度も何度も繰り返して同じことをしゃべる人のばあい、それは戦争経験ではなくて、私は戦争体験だと思ふのです。あるいは、老人が昔のことばかりしゃべる。それはその人の経験全体が過去化してしまつて、そのままの形で絶えず繰り返されていく。これもやはり、経験ではなくて体験、と私はよぶわけです。つまり、自然の普通の生涯において、未来が短くなつていくということは、その人の経験を過去のまわりに凝集させてしまふということと同じことになるわけです。

【C】ほんとうの経験というのはそうではない。本質的にそうではないと思ふのです。絶えず、そこに新しい出来事が起こり、それを絶えず⑩虚心坦懐に認めて、自分の中にその成果が⑪ちくせきされていく。そこに「経験」というものがあるので、経験というのは、あくまで未来へ向かつて開かれる。すべてが未来、あるいは将来へ向かつて開かれていく。というのは、つまりまったく新しいものを絶えず受け入れる用意ができていくということです。それが経験ということのほんとうの深い意味だと思ふのです。

【D】私のいうこの「経験」を、しばしば、体験ということばであらわす人があります。したがつて、この経験と体験との区別は、まったく私の用語法です。ですから、あることを体験ということばでいつている人を、体験ということばの上で立つて批判することはできないわけです。その体験ということばはどういうことをいつているか、もしかしたら、経験ということばを使つて、私が体験ということばでいおうとしていることをいつているかもしれない。そしてそうであつたばあひには、その経験ということばは非難さるべきだと思ふのです。

しかし、そういうことはあるとしても、(2) 私はどうしても経験と体験とは区別しなければならぬのです。われわれ人間の経験の内部には、そういうふうな過去に向かつて凝固してしまうという形と、未来に向かつて絶えず開いていく形——ちょうどベルグソンが『道徳と宗教の二源泉』においていつたような分極性があるからです。

【E】「経験の「閉ざされた」形と「開かれた」形——私はそれをあらわすために、「経験」と「体験」ということばを使つたのですが、この用語法は、あくまでも⑫めぐりてきなもので、それにとらわれる必要はない。私のいう経験と体験とは非常に⑬みつけつな形で結びついているし、私の考えでは、われわれは絶えず「体験」を「経験」に転化させるように努力しなくてはいけない。というのも、どんな「経験」でも「体験」になる傾向を持つており、また、どんな「体験」でも「経験」に向かつて開くようにすることができるからです。

われわれには、一つの経験しかない。その一つの経験が体験的なものに凝固してしまふか、あるいは経験的なものに⑭柔軟に開いていくか。それは、その一つのものを、われわれが、その中でどういうふうに行為するかということによつてきまつてくると思ふのです。ですから経験と体験というのは別のものがあるのではなくて、一つのものが、ある凝固した形をとるときに、それが「体験」で、それがあくまで新しい可能性に向か

って開かれているときに「経験」という名前を私はつけるのです。

【 F 】それを具体的に、何が体験か、何が経験かということのいちばん極端な例をとれば、(3)たとえば迷信なんか、体験の最も極端なものでしょう。あるときに、あることが有効だったというので、みんなそれが有効だと思って、それをがんばってまるといふ類です。

問一 傍線部①から⑭の漢字にはひらがなで読みをつけ、ひらがなは漢字に直しなさい。

問二 【 A 】から 【 F 】にあてはまることばを、つぎのなかから選んで答えなさい。

たとえば けれども ですから つまり 一方 もっとも

問三 本文中にある「虚心坦懐」ということばの意味として適切なものを、つぎのなかから選んで記号で答えなさい。

ア ○○○○という人物の名前

イ 心がむなしさま

ウ 心がうつろいが見えないさま

エ 何のわだかまりもなく、さっぱりしていて平らかな心さま

問四 本文中に傍線部(1)「しかし同時に、これは非常な危険を伴っている。」とあるが、これはどういうことか、八〇字程度で分かりやすく説明しなさい。

問五 本文中に傍線部(2)「私はどうしても経験と体験とは区別しなければならぬのです。」とあるが、どうして筆者はそのように述べるのか、七〇字程度で分かりやすく説明しなさい。

問六 本文中に傍線部(3)「たとえば迷信なんか、体験の最も極端なものでしょう。」とあるが、これを一〇〇字程度で分かりやすく説明しなさい。

問七 本文に対する、あなたの意見や感想を二〇〇字程度で書きなさい。